幼年絵雑誌『コドモノクニ』にみる戦時思想
――満州事変以降に着目して――

内田　　葵
（玉井研究会４年）

はじめに
Ⅰ　『コドモノクニ』の沿革と概要
　1　『コドモノクニ』の誌面構成
　2　『コドモノクニ』の読者
　3　『コドモノクニ』と政府
Ⅱ　『コドモノクニ』にみる戦時日本
　1　満州事変期
　2　日中戦争期
　3　太平洋戦争期
Ⅲ　『コドモノクニ』にみる理想の子ども像
　1　日中戦争期
　2　太平洋戦争期
おわりに

はじめに

幼年絵雑誌『コドモノクニ』は、大正11年１月に創刊され、昭和19年３月まで休刊を挟まずに23年３カ月の間発刊され続けた月刊絵雑誌である。大正から昭和戦時期の激動の時代と共に歩み続けた『コドモノクニ』の誌面には、当時の国民生活や思潮を反映する童謡、童話、絵画が多数掲載されている。

『コドモノクニ』について、その文学史上の特性については既に中村・岩崎によって研究が行われている[1)]。また、中村は戦時下における『コドモノクニ』に

注目した研究も行っているが、具体的な戦局の推移や国内・国際情勢に伴った『コドモノクニ』の変化については触れられていない[2)]。

本論文は、上述の既存研究を踏まえ、戦時下の『コドモノクニ』に注目し、満州事変、日中戦争、太平洋戦争と、戦局の推移を考慮しながら分析を加える。まず、第Ⅰ章においては『コドモノクニ』の沿革と概要について検証することで同誌がどのような雑誌を目指し、読者にどのように受容されたかを整理したい。第Ⅱ章においては、読者に『コドモノクニ』が戦争、ないし戦局についてどのような作品を掲載し、どのような理解を求めたかについて分析し、第Ⅲ章にて同誌に現れた戦時下における理想の子ども像を検証し、子どもに対してどのような戦時思想を付与しようとしたかについて、時局の移り変わりを重視しながらその変遷を追っていく。

Ⅰ　『コドモノクニ』の沿革と概要

1　『コドモノクニ』の誌面構成

絵雑誌『コドモノクニ』は、大正11年１月に創刊、以後昭和19年３月廃刊まで東京社より出版された全23巻287冊を数えた月刊の幼年絵雑誌である。想定された読者は34歳～小学校２年生くらいまでの男女で、約30～40頁の中に幼児向けの童謡、童話、絵画、楽譜、振付、時事的内容などが盛り込まれた。巻末は編集部から母親に対しての雑誌の使用法や幼児教育法、相談コーナーなどに割かれており、幼児向けの絵雑誌でありながらも母親向けの保育雑誌としての特色も兼ねていたことがわかる。濱口は、童謡・詩、絵がメインの頁、童話を含む物語となっている長い読物、（母親を想定した）大人向けの頁、漫画、楽譜となっている音楽の６つにカテゴリー分けをし、第１巻（大正11年）、第10巻（昭和６年）、第16巻（昭和12年）、第21巻（昭和17年）の４年分の雑誌の誌面構成を分析している[3)]。表１からは、時期によって多少の変化がみられるが、全時期を通じてその誌面構成に大きな変化はなかったことがわかる。

また、月刊誌であることから、掲載作品では季節が意識され、端午の節句やひな祭りといったその月の行事に加え、天長節などの祝日も紹介されている点が特徴的である。加えて、時事的内容も題材となっており、関東大震災や小串鉱山の山崩れなどの天災に関するものや、大正天皇の崩御や昭和天皇の即位、今上天皇の誕生などの皇室に関するものなど、直近の時事的内容を題材とした作品が多数

表１

	童謡・詩	絵	読み物	母の頁	漫画	音楽
第１巻	35.4	20.1	31.3	10.3	0.8	1.9
第10巻	19.5	36.2	11.2	20.6	0.9	11.4
第16巻	20.2	14.9	34.0	13.0	12.0	5.8
第21巻	37.4	20.1	28.6	12.5	1.3	0.0

濱口（平成18年）を参考に作成。
単位は全てパーセンテージで小数点第二位以下は四捨五入。

存在する。この点から、同誌は、その文化性や芸術性のみを追求しただけでなく、子どもに時事的な知識を与えようと試みていたといえよう。

さらに『コドモノクニ』は、米国絵雑誌『THE MOON』を手本に編集されたとされており、創刊当時から外国童謡や海外の様子を積極的に紹介している点が特徴的である。例えば、創刊初期の約10年間、岸邊福雄の西欧各国の周遊記が掲載され、そこで出会った人、見たものなどが記され、子どもたちに異国に対する興味・関心を付与した。また、世界旅行を題材とした作品では、世界の都市名や、アメリカ、パプアニューギニア、インドネシアに住む先住民の特色などが紹介された[4)]。このように、創刊当初から国際性を重視し、世界各国の様子を子どもに伝えることで国際的な視野をもたせようとしていたことがわかる。

本論文では、このような『コドモノクニ』の時事性と国際性に注目することで、戦時下において本誌が果たした啓蒙雑誌としての側面を見出したい。

２　『コドモノクニ』の読者

既述のような特色をもつ『コドモノクニ』を手に取ることができた読者層とはどのような人々であったかを分析していく。発刊当初の定価は50銭[5)] で、Ｂ５判サイズの厚手の用紙にオフセット５色刷りで当時としては高価で贅沢な仕上がりであった。また、昭和初年頃の発行部数は約２万部であり、販売方法は書店販売のみで幼稚園を通しての直接販売は行われていなかった[6)]。その普及経緯について編集部は、幼稚園や小学校にその価値を認められたことにより、知識階級の家庭に歓迎されるようになり、一般家庭になくてはならないものとなったと自賛している[7)]。

このように、読者の拡大とともに都心の子どもと田舎の子どもの双方に身近な

絵雑誌となるよう誌面構成の工夫もなされていた。編集部には、地方版新聞があるように田舎にも身近な内容にならないかとの読者の声も寄せられていたため、その希望を反映した結果といえた[8)]。これ以降、近代化が進み環境が著しく変化する東京の街並みとは対照的に、田舎の農村部の日常がその地方の風習や方言などを交えて紹介されていく。また、昭和初期の段階で支那や朝鮮にいる日本人からの絵画などの投稿が見られる点から、外地においても『コドモノクニ』は流通していたようである。このような環境の異なる同世代の子どもたちが皆一様に楽しむことができるような誌面構成が編集部に求められていたといえる。

3　『コドモノクニ』と政府

『コドモノクニ』も戦時に発刊された出版物であるが、国家の統制を受ける中で、同誌がどのような立場をとったのかを検証したい。まず、「本紙は創刊号より畏くも、澄宮殿下、並に東久邇宮盛厚王殿下、影常王殿下、朝香宮湛子女王殿下、北白川宮多恵子女王殿下、久邇宮恭仁子女王殿下台覧の光栄を忝ふして居ります」[9)]、「創刊以来、各宮若宮殿下姫宮殿下の御台覧を忝うしてをります」[10)] などと皇族が愛読している絵雑誌であることが頻繁に示されている。同誌は皇室御用達の絵本としての自負心を抱いていたことがわかる。

他方、昭和12年日中戦争の勃発以降、日本国内においては国民精神総動員運動が推進されることになるが、こうした気運は子ども向けの出版にも影響を与え、昭和13年頃から内務省警保局図書課は、児童文学の浄化運動を開始する。例えば、昭和13年７月15日に内務省図書企画課にて行われた懇談会において「強烈な色彩を使用しない事」「低俗な漫画を廃止する事」「事物を正確に写さない絵は用ひない事」「正しい言葉を使用する事」「誤つた英雄観念――例へば国定忠次などを英雄視したりする――を植えつけない事」などが指摘され、善処が求められた[11)]。これに対し『コドモノクニ』は、「以上の問題はコドモノクニに於ては十七年前その創刊された時から実行されてゐることで、幼児の絵雑誌の理想的標準として同業者各位も、内務省も認めてゐるところでした」と、その編集姿勢を変える必要がないとし、聊か余裕の姿勢を示していた[12)]。また、この内務省の浄化運動については「今までジヤーナリズムの上で批評の対象にもならなかつた子供絵雑誌」が内務省の統制の対象となったことで新聞や雑誌などで問題として取り上げられるようになったことは「幼児文学の為に甚だよろこばしい事」とし[13)]、「悪い点を指摘してゐる丈でなく良い物を保護し、はつきりした指導精神を示す一方、

廉価本の製作過程を研究して二十銭以下の絵本は思ひ切つて発売を禁止する位でなくては赤本は赤本としていつ迄も現在の状態に足踏みをしてゐるだらうと思ひます」と、内務省の統制により悪本が淘汰されることをむしろ歓迎する姿勢さえ示していた[14]。さらに内務省は昭和13年10月に「児童読物ニ関スル指示要綱」を作成した。これは官民合同で作成されたが[15]、民間有識者として参加した９名のうち、城戸幡太郎、小川未明、坪田譲二、百田宗治、波多野完治、霜田静志の６名は『コドモノクニ』で筆をとった経験のある者であった[16]。

このように同誌に執筆していた人物は政府の有識者会議に採用されるような人物であったことから、上記の統制強化について必ずしも心配する必要のない立場にあったともいえる。また編集部は「内務省の云はれた精神をはつきりつかまないですぐ一番イイジイな方法でしか表現せず、教科書のやうに面白くない雑誌が一律に生れさうな危険がします」との懸念を示していた。他の雑誌ではかかる指示要綱に従った短絡的な内容に堕する懸念があるが、『コドモノクニ』は娯楽性を失わず既にかかる内容を盛り込む内容であるとの自負を示していたのである[17]。実際に『コドモノクニ』では、昭和13年に内務大臣末次信正の話[18]、昭和14年に内閣総理大臣平沼騏一郎[19]の写真とコメントを掲載するなどして、政府や内務省の方針に即した幼年絵雑誌であることを内外に示していた。このように『コドモノクニ』の編集が、国家や政府の方針には協調の立場で進められたと推察できることは留意すべき点であろう。

Ⅱ　『コドモノクニ』にみる戦時日本

本章では、戦時下において『コドモノクニ』が戦争をどのように描き、子どもたちにどのように理解させようとしたかを検証する。ここでは、序文に示したように、戦局の推移を考慮し３つの時期区分を設けることとする。まず第１節では、昭和６年９月18日の満州事変発生から昭和13年７月７日の日中戦争開戦以前の段階（第10巻第11号～第16巻第９号）とし、満州事変をどのように定義したかを探る。第２節では、日中戦争開戦後、昭和16年12月８日の日米開戦に至るまでの時期（第16巻第10号～第20巻第12号）を対象に、日中戦争をどのように報じ、子どもたちにどのような印象を与えようとしたかを分析する。第３節では、日米開戦後、『コドモノクニ』廃刊に至る昭和19年３月まで（第21巻第１号～第23巻第３号）を対象に、戦局の変化と共に紙面がどのように変化していったかを分析する。これ

らから、民間出版でありながら政府から模範的絵雑誌と称賛を受けた同誌が、戦時をどのように描いたかを考察することが本章の目的である。

1　満州事変期

昭和６年９月18日、関東軍の南満州鉄道の爆破（柳条湖事件）を契機に満州事変が発生した。昭和７年１月28日に上海事変を経て、同年３月１日に満州国が建国される。『コドモノクニ』において、満州事変の勃発や経緯、満州国建国を明確に説明する作品は見当たらない。読者投稿を選定し当選した童画の中には事変に関する絵を確認できたものの、選評は事変については触れておらず、描写法などのコメントにとどまっている。

初めて満州について言及されたのは、満州国建国と同日に発行された昭和７年３月号の「黒豚、子豚―満州風景―」であり、夕陽に向かって黍畑を走る列車に向かってくる黒豚たちと、列車に向かってバンザイをする満州の子どもたちが描かれた。この作品について編集部は「今や国を挙げて満州事変の際、この画面、この童謡はお子さまにどんなに深い感銘をもたらすことでせう」[20] との指摘に止まっている。また、昭和８年12月号「新興満州国ノ子供タチ」では、満州の子どもたちが嬉しそうに遊んでいることや、満州の山頂に多くの日本人宅が存在することが示された。このように、建国の経緯などについては言及されなかったものの、満州の様子を紹介することによって、同地について子どもたちの関心を集めようとしていたことがわかる。さらに、満州人が日本に万歳をする様子からは、満州国民が日本を慕っていることを印象づけ、日本人の優位性を描き出しているともいえよう。

さらに、日満両国の皇族が互いに行き来している様子も紹介され、満州国との友好関係を示す作品が紹介された。例えば、昭和９年３月１日に溥儀が満州国皇帝に即位したことを受けて秩父宮雍仁親王が渡満したこと[21] や、その返礼で昭和10年４月６日に溥儀が来日したことを伝える作品が掲載された[22]。特に溥儀の来日に関しては、祝砲や花火をあげて出迎えた様子が示され、「日本ぢゃ万歳、万万歳、満州ぢゃ万歳、万万歳」と、両国にとって喜ばしい出来事であることが紹介されていた。また、満州の様子についてはその広大な土地を印象づける作品が多い。例えば、昭和９年10月号「ノロさんの駈けくら」では北安鎮の野原が描かれ、電車が通るとノロという獣が追って駆けてくる様子が描かれた。昭和11年12月号「マンシウ」では、狭く汚いところで飼われている日本の豚と広大な野原

でのびのびと生きる満州の豚を比較し、満州には日本本土にはない生活環境が広がることが暗示されていた。

加えて、満州が国際色豊かな地であることも紹介された。例えば、昭和８年10月号「ハルピンノ朝」では、白人種の婦人２人と子ども３人、黄色人種の男性が１名、朝市に出かける様子が描かれ、母親向けにも「北満の国際都市ハルピンには三十か国以上の民族が移住してゐますからその人種だけでも仲々多彩です」[23]と、国際都市ハルピンが紹介された。また、昭和８年11月号「ハルピンノ馬車屋サン」では、ロシア人の馬車屋には将軍の面影のある者が多いことが示された。これらの作品を通じ、満州をして様々な国の人が移り住むのどかな楽土として描き、満州への憧れを抱かせようとしていた。

満州国建国や満州地域での戦闘状態が落ち着いた頃から、満州進出の意義について満州地域の匪賊退治と治安維持を図る目的であることが示唆されるようになる。例えば、日本兵が満州で匪賊の番をする理由を、満州国人のため、満州に住んでいる日本人が皆安心して暮らしていけるようにするためだと説明している（図１）[24]。また、昭和11年３月号から10回にわたり連載された漫画「バクダン小僧」では、陸軍省の命令で満州へ匪賊退治に出かける話[25]や、関東軍から蒙古兵が満州領に入り込んだとの知らせを受けて蒙古兵退治に行く話[26]などが紹介された。特に、八方から満州に押し寄せてくる匪賊を退治する話の中では、勇ましい日本軍の進軍ラッパの音と日本将校の突撃の号令と兵隊の叫び声を聞いただけで「匪賊ドモ」は「日本軍ガコンナトコロニカクレテヰタ。コレハ堪ラン。逃ゲロ／＼。」と蜘蛛の子を散らすように逃げていったことが描かれている[27]。このように、満州出兵については匪賊退治や治安維持のためであることが強調された。

満州事変を直接描写する作品は少ない一方で、軍事的題材は増加し、子どもに対して軍事に対する知識や興味を付与することで、戦時を理解させる試みもなされるようになる。第一に、兵器や軍事技術についての作品が増加したことが指摘できる。昭和７年春の増刊号で兵器特集が組まれたことがその典型で[28]、編集部はこれらの軍事的題材に関して母親向けの頁に詳細な説明や性能、費用などの情報を掲載していた。母親が子どもに対し説明や補足を加えることで、読者としての子どもの理解を深め、軍事に関する知識向上を目指していた。また、子どもにもイメージが湧くよう様々な手法を用いて兵器の用途や性能についての説明を試みている点も興味深い。例えば、列車砲の砲弾については、富士山の５倍も高い

図１

ところ（標高15000メートル）を通って52キロメートルも離れた中芦川（甲府の４厘手前）まで到達することを図解で説明し、その飛距離や威力を強調していた[29]。

第二に、第一次世界大戦（欧州大戦）の戦訓から世界各国が軍事技術を発達させていることを強調し、日本も国防のためにも軍事力に注力する必要があることを説いていた。例えば、昭和７年３月号の「タンク」では、見開き１頁を大胆に使い、戦車を歯車やネジの細部にわたって精巧に描いている。母親向けの頁においてこの作品は「装甲戦車は一九一六年かの欧州大戦中、英国が発明使用して大いに偉勲を奏したことは御承知の通りです」[30] と、他国の軍事事情に言及しながら説明されていた。さらに軍用犬や警察犬がどのように戦地で役立つかを説明した作品[31] に関しては「欧州大戦以来、今や各国軍隊は、競って軍用犬の飼育と訓練に、力を傾注してゐて、今後、軍用犬の役割が如何に重要であるかを、如実に物語つてゐます」[32] と日本の軍事力も世界に劣ることなく強化されていると説かれた。また、同時期の日本においては第一次世界大戦における航空戦力の発達を受けて、防空の必要性が叫ばれていた。昭和８年８月には関東での大規模な防空演習が行われ、昭和12（1937）年４月５日には防空法が制定されている[33]。実生活においても戦争を想定した訓練が行われたことにより、『コドモノクニ』においても関東防空大演習に関する作品が掲載され[34]、「航空機の出現は戦争の方法を一変させてしまひました。若し、航空機に対する何等の防御整備をも有しない国があるとしたら、今たつた一台の爆撃機をもつてその国を降伏させてしまふことは、左程困難ではありません」[35] と、空襲の脅威を印象づけると共に、自衛のための軍事力、航空戦力の重要性が強調された。

第三の特徴は、海軍記念日や陸軍記念日を紹介するようになった点である。陸軍記念日は明治38年３月10日、日露戦争の奉天会戦で日本陸軍が勝利し奉天を占領して奉天城に入城した日、海軍記念日は同年５月27日、同じく日露戦争の日本海海戦において日本海軍がロシアのバルチック艦隊を撃滅した日をそれぞれ記念

して、どちらも翌年明治39年に制定された。『コドモノクニ』発刊以前からこの記念日は存在したが、第14巻（昭和10年）において初めて「記念日」という言葉を用いて陸軍・海軍記念日が紹介された[36)]。

さらに、特筆すべきは、戦争そのものの意義について言及した作品が掲載された点である。ここでは「ヘイワノアベコベ」が戦争であるとし、世界中の人間は愛国心を有しており「ホロビタクナイカラ　セカイノ　ヘイワヲノゾムカラ」国防に励んでいること、また平和のために国防を築いていると説明した。そして「日本ノコドモタチヨ　センソウハマダマダ　ツヅクノデス」「ボクタチハイツデモ　セカイヘイワノタメ　タタカイマセウ」と呼びかけている[37)]。このように戦争と平和が表裏一体の関係であることを解説しながら戦争の意義に対する理解を求めていた。

2　日中戦争期

昭和12年７月７日、盧溝橋事件を契機に日本と支那は全面戦争へと突入する。本節では『コドモノクニ』が日中戦争をどのように描いたかを分析する。前節にてみてきた満州事変期とは異なり、日中戦争期は敵国として「支那兵」が表徴され、昭和12年増刊号『日本ハツヨイ』[38)] の発刊など、その戦局について言及された作品を確認することができる。日中戦争の原因については、戦争をしないことを約束していたにもかかわらず、支那兵がその約束を破りむやみに発砲してくるので、「がまんづよい日本ぐん」もしびれを切らして「しなへいをこらすいくさ」が開始されたと説明された。「しなへいにばかにされてはなりませんからね」とも紹介され、日中戦争の意義は膺懲であるとの説明がなされた[39)]。母親向けの頁でも、日中戦争の意義については「『正義のため膺懲の軍』を進めているということは内外に宣明」されていると説明された[40)]。さらに、事変については、日本の勝利によって１年弱で終結したかのような印象を与える作品も多い。例えば、上海の様子について紹介する作品には「支那さんも戦争やすみだ　びはとピアノでうたはうよ」[41)] と和やかな軍人たちの写真が掲載され、「センソウモスンデ」上海は活気を取り戻しており「アチコチニ、日ノ丸ノ旗ガ　ヒルガヘ」っていると紹介された[42)]。さらに、「センソウニ　マケタ　シナノ　コドモタチガ　ドンナニ　カハイサウカ」と支那の敗北を明示し、敗戦による支那の物資不足も強調された[43)]。このように戦線が緊迫した状況にないことが読者に印象づけられていたのである。

しかし、日中戦争長期化につれ、その論調に変化が現れ、傷痍兵の存在を紹介する作品が増加するようになる。例えば、昭和14年６月号「オケガノヘイタイサンエライナ」では、傷兵保護院の山根編一郎の文章が掲載され、義足の兵士が東京第一軍病院で相撲をとっている写真が紹介された。さらに、昭和15年11月号「私はこんなことをして働きました」では、８つの投稿のうち陸軍病院慰問に関するものが２つ、出征兵について「ニッポンノヘイタイサンハホンタウニ、エライナアトオモッタ」と記された作品が１つ紹介された。『コドモノクニ』において、日中戦争の長期化の原因について言及されることはなかったが、戦争が継続し、兵士が傷つきながら戦っている現状が子どもたちに間接的にではあるが描かれていた。

加えて、アジアの盟主としての日本を示すことで、アジアのための聖戦として日中戦争を意義づける言説も増加する。昭和14年８月号「ナンヤウノセイガクセイ」では、第一次世界大戦後に日本の委任統治領となったヤップ島で「クロイドジンノコドモタチ」が日本人の教師に算術を教わっている様子が紹介され、南洋の子どもたちが愉快に遊び元気で勉強できるのは「ニッポンノオカゲ」であり、「ニッポンガナンヤウヲオサメルヤウニナッテカラモウ十九ネンニナリマス」と説明された。委任統治領の子どもの教育環境を日本が提供し、現地において感謝されていることを印象づけようとしている。さらに、昭和16年７月号「ススムススムニッポンニッポン」では、日中戦争を「トウヤウノヘイワノタメノウツクシイタタカヒ」と、「美しい」という形容詞を用い美化しながら、東洋平和のための戦いと日中戦争を解説していた。

他方、戦闘における日本軍については、その強さが強調して描かれていた。例えば、宛平県城砲撃を題材とした北原白秋作の「ドカン」が掲載されている（図２）[44]。宛平県城は、盧溝橋事件の際、日本と支那の武力衝突の舞台となった場所である。作品では、大砲の砲手の目線で宛平県城から多数の兵士が吹き飛んでいる様子が描かれ、望楼や「シナヘイ」が日本軍の撃った「ドカンデフツトンダ」という、幼児雑誌にしては少々過激な言葉を用いた内容の詩も掲載された。詩の連は「ソレミロアサヒガクモカラ　アガツタ」と、日本の勝利を煽情的に表現していた。また昭和12年10月号「センサウゴツコ」では、「ボクラハツヨイニッポングン」で「シナヘイナンカニマケナイ」と日本軍と支那軍を比較した上で、日本軍の方が強く勝っていることを強調しており「サアトツゲキダトツカンダ、キリコメツツコメテキヂンチ。ニゲルテキヘイネラヒウチ」と攻撃や進軍をする日

本軍と、逃亡する支那兵を対照的に描き出している（図3）。さらに昭和12年11月号「少年航空兵」では、少年航空兵の兄が「一寸（ちよつと）、行つて来るよ」と支那海を越えて南京に向かい、「一寸（ちよつと）、やつてやろか」と爆弾を落として手柄を立て「一寸（ちよつと）、行つて来たよ」と口笛を吹きながらさっと帰った、という内容の詩も掲載された。このように、少年航空兵でさえも、支那を「一寸（ちよつと）」の労力で倒すことができることをうたい日本軍の強さを印象づけていた。

図2

図3

しかし、こうした誌面の反面において、『コドモノクニ』が当時のマスメディアの行き過ぎた煽情報道や支那への蔑視に対して警鐘を鳴らした点は特筆すべきであろう。昭和12年11月号「人間的品位（ヒユーマン・デイグニテイー）の尊重が願はしい―遠縁のある若き母親に寄せて―」では、当時の新聞記事の中で「敵兵廿名西瓜斬り」「支那兵なんかまるで大根か蕪のやうなものさ、いくら斬つたつてちつとも手応えがない」などと報道されていることに疑問を抱いた母親に対して「教養ある婦人としての知性の高さに敬意を表した」と評価している。すなわち、戦争自体が人類的な立場からすれば痛ましい出来事であるが、最大の傷心事は人間に対する凌辱が伴われやすいことだとし、「往年の尼港事件や最近の通州事件が、あれほどにもわが国民の痛憤を買つた」のもこうした「人間凌辱を堪え難しとする心情」からであると説明していた。日本の膺懲に対する正義について「敵兵に対してもその人間的品位を尊重し得る程の大きな自信」があってよいと述べつつも、「正義を世界に布くといふからには、その正義は世界の良心によつて挙つてしじされるやうな

ものであつてほしい」、「それはまた、次のジエネレーシヨンを、真に正義を愛する大国民に育て上げるためにも大切なことではないでせうか」と、同時代の粗野で品性を欠きがちな言論空間を戒めていた[45]。

さらに編集部は、軍事的内容を扱う際にも細心の注意を払っていたことがわかる。例えば、店頭に並ぶ幼児雑誌が、どれも一冊の半分以上の頁を兵隊の絵で埋めている状況に疑問を呈し「いたづらに、幼児の興味に追随するため、大人の考へから、殺伐な絵や文を童心に与へる事は考へなければならない」と警告を発している[46]。とりわけ、臨時増刊『日本ハツヨイ』の発刊経緯については、「現実としてわれわれの周囲に起ってゐる事変を子供に見せまいとする感傷的自由主義者」や「ただ子供の興味をどんな方法でも刺激すればいいと思ってゐる商売人」の中で『コドモノクニ』は「独自の立場」に立ち、なぜ事変が起こり、前線ではどのような兵器を用いてどのように戦っているのかを描いた唯一の雑誌であるとの説明がなされた[47]。このように戦争を題材にする際に理性的である編集方針を度々自負しながら「幼児に戦争への正しい考へ方を与へる」絵を掲載するとの姿勢を示していた[48]。『コドモノクニ』は、軍事的な内容を「時事的素材」として掲載することは厭わなかったものの、その内容が戦意高揚を煽るだけの内容にならないよう配慮していた。また、自国に関する記事についてもその姿勢を徹底しようとしていた。例えば、「日本的なもの」は絶対的なものであるかのような考え方を知らず知らずの間に教え込むことは、「事物を客観的妥当性に於いて考える態度、科学的な精神、文化人として高き教養等の芽生へぬうちから、ふみにじる結果になるのではないか。ほんとうにすぐれた日本国民をつくり上げる所以ではないと思ふ」[49] と唯我独尊に陥る危険を述べている。『コドモノクニ』は、戦時においても客観性を保持した誌面作りを心がけようとしていたのである。

3　太平洋戦争期

昭和16年12月８日の真珠湾奇襲攻撃によって太平洋戦争が開戦すると、日中戦争に関する戦局報道はほとんどなくなり、『コドモノクニ』の関心は、英米へと移っていった。そして、大東亜共栄圏建設が叫ばれ、日本が英米によって支配されていた植民地を解放することでアジアに平和がもたらされるとの論調が目立つようになる。以下、戦局と敵国、また救済の対象であるアジア諸国がどのように紹介されたかを分析する。

まず、戦局について具体的に述べられたのは、日本の勝利についてである。特

に昭和17年２月号では「南方特集」が組まれ、フィリピン陥落や南洋諸島の日本の委任統治領に関する作品が多数掲載された。さらに、昭和17年３月号では「海洋特集」が組まれ、マレー沖海戦やシンガポール陥落についての作品が掲載された。同時期において、真珠湾攻撃やマレー沖海戦は、日本の快勝と米英の敗退を鮮烈に印象づける題材として用いられたことが指摘されているが[50]、『コドモノクニ』において前線の激しい戦闘は描かれていなかった。例えば、マレー沖海戦については英国の戦艦プリンス・オブ・ウェールズ、レパルス撃沈の様子ではなく、むしろこれらの敵艦の沈んだ海に弔いの花輪を投げる日本軍をメインに描いていた[51]。また、シンガポール陥落については戦況を報じるラジオ放送を題材とし、同地は「イギリスガアジアヲイヂメテヰタミナト」と紹介し、今後日本の港になることが説明された[52]。このように同誌において攻撃や戦闘を主題として描く作品は存在しなかったものの、実際の戦局報道や戦域の紹介をすることで子どもにより具体的に前線をイメージさせようとしていた。しかし、昭和17年６月５日のミッドウェー海戦での大敗を機に日本の立場は劣勢に追い込まれると、実際の戦局について地名などを挙げ詳細に紹介する作品は減少する。

ミッドウェーでの敗戦以降、『コドモノクニ』では、日本軍の進軍の様子や兵器について言及した作品には時折「陸軍省検閲済」「海軍省許可」の文字が確認されるようになる[53]。例えば、敵の要塞を落としたこと[54]や、日本軍が南方において勝っていること[55]が紹介された作品に検閲済、許可済みの文字が付いている。これらの作品に煽情的な表現はなく、前線の様子を伝えるものにとどまっている。

続いて、敵国米英については、その脆弱性を強調することで、日本兵の強さを描き出した。例えば、コレヒドール島の戦いに関する作品では、日本軍が「アメリカ兵をかうさんさせ」12000人を捕虜にしたことが示された。また、アメリカ兵を「弱い敵兵」とし、「みんな大きな兵隊のくせに、小さい体の日本の兵隊さんに負けてゐます、中には落書のやうに『イレズミ』をしてゐて『こんなふまじめな精神では戦争に勝てるわけがない』と、どこでも日本の兵隊さんに笑はれてゐます」という文章と共に、入れ墨の入ったアメリカ兵を紹介していた（**図４**）[56]。日米開戦後の戦時プロパガンダの一環として敵米英の弱さが強調されたことが指摘されているが[57]、『コドモノクニ』においても、アメリカ兵の「不真面目さ」「弱さ」を描き出すことによって日本軍の「真面目さ」「強さ」を強調しようとしていた。また、マレー半島ゲマスにおける戦いに関する作品では、イギリス軍から

図４

総攻撃を受けたことが紹介された。イギリス軍の攻撃の理由を「イギリス軍はさんざんに日本軍からやつつけられて」、シンガポールに加えクアラ・ルンプールまで占領されたことが「くやしい」のだと説明した。日本兵は「なにくそ！　ばくげきにくるなんてなまいきなやつだ」「こいつめ！　日本軍のうでまへを知らないのかよしツこれでもくらへ！」と反撃し、勝利を収めたことが伝えられた[58]。このように戦果を重ねるごとに米英兵の弱さに焦点を当てることで日本軍の強さを強調し、マレー沖海戦で屈辱を味わったイギリスが日本軍に対抗することは「生意気」であるとまで言い放つ奢りの姿勢も見受けられた。ここから英米との戦いで勝利を収めたことで、日本が自信を深めていった様子がみてとれる。

ここで特筆すべきは、日中戦争期とは異なり、煽情的で過激な新聞報道に対する批判がなされなかった点である。例えば、昭和18年１月号の母親向けの頁においては「英軍の俘虜や遺棄屍体を検べると、彼らはきまつて他愛のないお伽噺の本を持つてゐた。こんな幼稚な頭であるから、英軍が惨敗するのも当然である」とのマレー沖海戦当時の新聞報道に対し、「英国が依然として、中世期以来のお伽噺に今もつてあきたりてゐることを、単的に証明したものだ」とし新しい文化を生み出す創造力のない「英国の憐れむべき全体を、単的に暴露したもの」と侮蔑していた。また「その民族性の影の薄さ」からは「アングロサクソンがいかに没落すべき運命の民族であるか、想到するに難くないでせう」と断じている[59]。敵兵に対してその民族性を否定し没落すべきと断言する姿勢は、敵に対しても人間的品位を尊重し理性的な姿勢の堅持が重要と説いていた日中戦争期のそれとは対照的である。

ミッドウェー海戦後、米軍の反攻が激しさを増し民間にまで被害が及ぶようになると、鬼畜米英の標語に象徴されるような人種偏見や憎悪を掻き立てる言論や運動が展開されたことが指摘されているが[60]、昭和19年になると、子ども向けの読み物内でもこうした傾向が表出し、米英人の非人道性が強調して描かれるよう

になった。例えば、昭和19年２月号では米軍による病院船攻撃を題材とした作品が掲載された[61]。作品内では米国を「オニヨリモヒケフナテキ・アメリカ」と表現し、病院船を12回も爆撃した非人道的な行為について「イマニミロイマニミロトボクタチハハヲクヒシバリマシタ」と屈辱と憎悪を燃やす子どもの様子が描かれた。ほかにも、星条旗を的に弓矢の練習をする様子を紹介する作品や[62]、「ベイ・エイゲキメツ」[63] などの言葉を用いることで戦意高揚を煽っていった。また、近親者の戦死に対する哀しみを米英への敵対心に向けることで戦争を「敵討ち」と表現した作品も登場する。昭和19年３月号では「『軍人援護』特集」が組まれ、戦死した父親とその子を題材とした作品の多くが、父を失った寂しさと敵への憎しみを描き出す作品であった。例えば、父を失った寂しさや妹たちや遺骨を守っていく責任に押しつぶされそうになりながらも、父の息子である自分は強いのだと鼓舞し、敵討ちのために軍人になることを決心する少年を描く作品が掲載された[64]。このように肉親の戦死を利用して敵への憎悪を醸成し、敵討ちと表現することで子どもの戦意高揚を図っていた。以上、日本が劣勢になるにつれ『コドモノクニ』が保ってきた理性や客観性が失われ、煽情的な反米英観が強められていたことが明らかになった。

しかし、これら煽情的な文章とは対照的に、掲載された絵は極めて理性的であったことは確認しておきたい。例えば、先述の米国による病院船爆撃に関する作品で描かれたのは爆撃の瞬間ではなく、南洋の港に病院船が停泊する様子であり、米兵を鬼畜に描いたり、ユニオンジャックや星条旗を棄損したりする絵は掲載されなかった。言葉や文章において煽情的な作品が増加したものの、絵画に関しては抑制的表現であり、若干の乖離さえも感じられたことは留意したい。

ところで、日本の委任統治領となったアジア諸国については、のどかで平和な自然や活気あふれる街の様子が描かれた。例えば「ナンヤウノシマ」では「わが委任統治領の風景」を「平和境」[65] と紹介し、「ダバオ」も「今から三十五年ほど前、邦人の辛苦でマニラ廠が拓かれ、今も市中の商店は、殆んど日本商店」[66] であることが説明された。また、マニラの陥落については「なまなましい感激」があるとし[67]、日本兵に守られ、畑には日の丸の旗が立ち「ニッポンノカゼガフイテヰル」と絵にキャプションが入っている（図５）[68]。このように英米のいなくなったアジアには平和が訪れるとの印象を読者に与えていた。また、アジアの子はみな日本が好きであるという言説も増加する。例えば、日本と遠く離れていて環境も異なる国に住んでいても「オナジ東亜ノオトモダチ」なので「ナカヨク

図5

シヨウ」と促したり[69]、ジャワの子どもは日本の子どもが大好きだから、大好きなお砂糖を送ってあげようと、サトウキビを運んでいること[70]が紹介されたりした。さらに日本と同様にアジアにおいて独立を守ってきたタイについては、昭和16年12月12日の日泰攻守同盟条約締結もあり、日本との友好関係を明示した作品が掲載された[71]。このように、日本が東南アジア諸国から支持を集めていることが示された。

特筆すべきは、日本からみたアジアではなく、アジアからみた日本を描くことによって、アジアの中心となる日本を巧みに表現している点である。例えば、「シナノオカアサン」が我が子に「オホキクナッタラニッポンジントナカヨクシテ、アジアヲリッパニスルノデスヨ」と諭す様子[72]が紹介されたが、日本をアジアのリーダーと捉え、東亜新秩序を構築するためにアジアの人々は日本に協力するであろう、とアジア人の目線で描写し解説していたのである。

Ⅲ　『コドモノクニ』にみる理想の子ども像

本章では、『コドモノクニ』が子どもたちにどのような生活、精神を要求したかを検証する。分析期間は前章と同様に、満州事変期、日中戦争期、太平洋戦争期としたが、満州事変期において戦時日本の理想的な子ども像が示された作品は存在しなかった。これは、それだけ戦争が国民にとって身近なものでなかったことを示しているといえよう。したがって本章では、日中戦争期と太平洋戦争期に注目し『コドモノクニ』が子どもたちに与えようとした戦時思想を考察することが本章の目的である。

1　日中戦争期

日中戦争期の『コドモノクニ』においては、生活面と精神面の２点から子どもに向けて啓蒙活動を行っている。

同時期の生活面については、貯金と節約が呼びかけられた。政府は、資金や物的資源を戦争に充てるため貯蓄を強力に推し進め、消費や浪費を悪と位置づけていたが[73]、これは子どもの世界においても啓蒙されており、同誌でも国家のために貯金と節約に協力するよう促されていた。例えば昭和13年９月号「大センソウハコレカラデスボクラハモノヲ大セツニシマス」では、グラビア写真付きで見開き３頁にわたって、貯金された金は戦地に送られ役に立つこと、ドイツやイタリア、スペイン、フランスも工夫を凝らして節約をしているのだから日本も戦争に勝つためには我慢をしなければならないとの考えを展開した。また、子どもたちにもできる身近な節約が列挙された。例えば、肉や卵の入った弁当を控え日の丸弁当にすること、ご馳走やおやつは慎むこと、革製品は鮫や鯨などの皮の代用品[74] を購入すること、消しゴムの節約のために唾で擦って文字を消すことは紙が破けて裏側を使えなくなってしまうので良くないなどの例示がなされた。加えて、なぜ節約をしなければならないかについても言及されており、皆が奨励しているからとの認識にとどまっている友人たちとは対照的に、日本は戦争中で戦地に物資が必要であると理解している「カシコイ」男児が描かれた[75]。このように、国の非常時であることを理解した上で貯金や節約をすることが模範的であると推奨され、贅沢を悪とする世論が形成されていたことが見て取れる。

また、『コドモノクニ』の読者層が比較的裕福であったことを受け、編集部は読者層の生活水準の高さに言及し、それを非難した。例えば、隣組に非協力的な姿勢の読者に対しては「ことに社会的協力には最も理解と熱意のないと言われる所謂上流階級の方々の頭は此の際断然たたき直されねばならない」とし「お隣りとの間の防壁のやうな高い壁を打壊はし、一億一心を具現化するためには、まづ子供からと言ひたい」と促した[76]。また、フルーツパーラーを題材にした子どもからの寄稿作品について、編集部は「根本的な生活の転換に迫られてゐるとき、かうした題材でうたを作ることには、創作の動機がうたがはれる」[77] と母親向けに苦言を呈した。このように、編集部は質素倹約を美徳であることを子どもたちに印象づけ、読者の浮世離れした感覚に対して批判を浴びせていた。

続いて精神面の啓蒙については、子どもたちに日本人であることに誇りを抱かせる作品が掲載された。例えば、「内務大臣末次信正閣下のおはなし」として、大日本帝国が世界に２つとない立派な国であることをはっきりと知り、天皇陛下に忠義を尽くし父母には孝行を尽くす立派な日本国民となるために学校に通うのだということを忘れないようにすること、どこの国の子どもたちにも負けてはな

らないことなどが小学校入学の祝辞として紹介された[78]。また、日本の国民性に根拠を見出して様々な事象を紹介する例もあった。例えばアサガオの花については、1000年前に支那からもってきた当時は少しも美しくない雑草であったが、日本の土で日本人の手で育てられると大きく美しい花になったと説明され[79]、日本兵は日本人であるから強く、おもちゃの兵も日本で生まれたので強いとの詩も掲載された[80]。このように、日本人としての自覚と誇りをもった強い人間になるように、あるいは日本に生を受けると強くなることが、子どもたちに説かれた。なお、誌面全体がこのような作品で埋まることはなく、依然として国際色豊かな特色も顕在し、前章２節でも確認した通り、日本的なもののみを肯定する主張を牽制する姿勢があったことは留意しておきたい。

他方、子どもの海洋観についても言及され、海洋国日本の子どもは海の子どもであり、世界に進出していくべき存在であるとの主張を行った。例えば、日本は海に囲まれた国なので仕事をしに行くには海を渡らねばならないこと、大きくなったら海を渡ってどんどん外国へ仕事をしに行かねばならないこと、そのためにはどんな荒海も恐れない強い海国日本の子どもにならなければならないことが示された[81]。このような海洋観を打ち出した背景について編集部は、海国であるにもかかわらず「日本のコドモの海に対する関心が興味が割合に浅いとはいへますまいか」と述べ、海に対する認識が、「英国人のそれのやうに殆ど断ちがたい愛着にまで行きつくことは将来の国民に期待しなければいけない」と主張している[82]。また、海難救助設備が「英国や米国等に劣っている」点については「海国民としてはづかしい次第である」と危機感を示し、子どもに新しい海洋観を付与することの必要性を訴えていた[83]。また同時期において、政府が子どもたちの航空機に対する関心を高めようと広報活動を行っていたことが指摘されているが[84]、『コドモノクニ』においてもグライダーや模型飛行機に関する作品は多数確認できた。例えば、昭和14年７月号では模型飛行機を手に空を見上げる少年たちの写真[85]を掲載したり、子どもたちでも作ることができる身近な紙飛行機や模型飛行機と、操縦士にならなければ乗ることができないグライダーや戦闘機を並べて掲載したりすることで、航空機や操縦士への憧れを醸成していた[86]。

２　太平洋戦争期

本節では、太平洋戦争下における理想のあるべき子どもの姿について、前節と同様に生活面と精神面の２点からその内容について分析していく。

図６

まず、生活面については、子どもの遊び方について指導する作品が掲載された。絵を描く際には紙の代わりに石盤を用いる様子や[87]、女児たちが人形を傷痍兵に見立てて担架で運んで遊ぶ様子を描いた作品[88]が掲載された。また、砂場では山やトンネルではなく防空壕を作ることが奨励された[89]。このように戦争に適応した遊びを紹介していることからも、子どもの生活に戦争がより身近になってきたことがわかる。

日中戦争の長期化により物資不足はさらに深刻化した。食糧に関しては、米と並んで藷類も主食として配給制となり[90]、『コドモノクニ』でも「この決戦時下に、芋類はおやつであるとか、代用食であるなどといふあまい考へ方は、私たちの頭からきれいに失くしてしまひませう。そして、お芋は大事な主食物であり、ごはんであるといふことを、しつかりたたきこみませう」[91]と、食に対する認識の改変を促していた[92]。昭和18年９月号の「いもがゆ」では、宇治拾遺物語において芋粥がご馳走として紹介されたことを示し、「勝ち抜くために、私たちもこれからお芋をごはんとしておいしくたべませう」と鎌倉時代の食生活に退行していく現状に対して無理のある説明をしていた[93]。また食糧以外にも、昭和16年９月に金属類回収令が施行され、一般家庭に対して金属の供出も要請されるようになる[94]。こうした要請は、子どもの世界にも反映され、街の鉄や銅を回収し、工場や建物から鉄を取り外すことで造船に役立てること（図６）[95]や、寺の鐘までも戦地に送られる様子[96]など金属供出に関する作品が掲載された。さらに、家庭燃料であるガスや木炭に対する統制も日米開戦以降一層厳しさを増し[97]、昭和18年２月号「ストーブ」では、今年のストーブ（暖炉）は冷たいが、ストーブを燃していた昨年の冬を思い出すと暖かい気がすると、１年で生活環境が大きく変わったことがうたわれた。このように開戦２年足らずで国民生活は窮迫していたことがわかる。

また、子どもによる慰問品が喜ばれると説明し、前線へ送るための慰問袋や慰問帳の作成を呼びかけられた[98]。例えば昭和18年９月号「作って送らう慰問帳」[99]では、子どもの慰問活動について「この戦ひを最も素直に、敏感に身につ

けてゐるものは子供等です」と慰問の中心となっているのは子どもであることを示し、軍人も子どもの純粋な慈愛に支えられていると論じた上で、慰問文の書き方が紹介された。

さらに、昭和18年になると、出征を見送る場面を描いた作品が増加するようになる。この時期は戦局悪化による兵力不足によって学徒出陣が開始されるなど、読者の近親者も多くが徴兵・徴用されていた時期である。男児には、兵隊として将来戦地に出ることが求められ、女児には労働に出ることを求める記事が多くみられる。例えば、出征する兄についてはその心境について「ウレシカラウ」と紹介され、出征を喜ばしい事であることが印象づけられていた[100]。また、軍人になりたいと熱望する男児を描く作品も多くみられ[101]、我が子の出征を拒む母親に対しては「戦ふ日本の母がこんなことでは話になりません」と一蹴し、男児は戦地に送る覚悟で育てよと説かれた[102]。一方、女児向けには、男性の出征によって労働力不足となった社会を女性が支えていくことが求められた。例えば、勝つためになら何でもやると、もともと男性が行っていた駅での仕事に就く女性の姿[103]や、子どもに働いてもらうほどうちは困っていないという両親の反対を「オウチガコマッテヰナクテモ、ハタラカネバナラナイトキデス。イマハヒトリデモアソンデヰテハ、センサウニカテナイノデス」と押し切り、国民学校卒業後に駅で働く少女[104]が描かれた。このように、子どもたちの望ましい将来像として男児は戦地へ赴くこと、女児は労働に出ることを理想的とする作品が増加していった。

続いて、精神面の啓蒙についてみていく。太平洋戦争期には精神論が増加し、特に「武士道」や「神」について言及し、その精神的な意味を子どもに教えようとする作品が目立つようになる。

「武士道」については、その礼儀や忠誠心に注目し、日本軍の強さの根拠として説明された。例えば、既述のようにマレー沖海戦翌日に、敵艦の沈んだ海へ花輪を投下して、敵艦と敵の霊を弔う日本の航空隊が紹介され[105]、「なんといふ床しさ、気高さ、美しさ、これだから皇軍は無敵なのです。時代は移つても、武器は変つても、わが武士道はいよいよその真価を発揮しつゝあります」と説明されている[106]。ここからは武士の精神をもつ日本人は美しく強く、このような精神をもつ子どもを理想的としていたことがわかる。一方で、日本伝統の精神や美徳をもち合わせない米英人を悪例として紹介することで、読者に忠義や恩義の重要性を教え込んだ。例えば、昭和17年６月号「北満の兵隊さん」の絵の説明におい

て、南方の戦果にばかり注目し北方の兵隊を忘れることは「浮薄な英米人のようだ」と言われても仕方がないと、北方への慰問を促した[107)]。さらに、戦国武将の伝記を戦局と照らし合わせて紹介する作品ではこの論調が顕著であった。例えば、上杉謙信については、宿敵である武田信玄に対して親切を施し、信玄の訃報を聞くと「あそびごとや、おんがくをやめて、信玄をとむらひました。武士のうつくしいこころがけです」と紹介された。一方で「アメリカやイギリス軍には、さむらひのこころがわからないのです。そして、日本の負傷兵をなぶりごろしにしたりするのです」と米英の品性のなさや惨たらしさが指摘された[108)]。また、豊臣秀吉については、「けらいをよくかあいがり」、「くるしいことはけらいと一しょにくるしみ、たのしいことはけらいと一しょにたのしみました」と部下思いの武将であったことを紹介しつつ、「日本のえらい大将はみなさうです」と日本軍の指揮を執る軍人もその精神を受け継いでいると説明した。それとは対照的に、部下を見捨てフィリピンを撤退したマッカーサーを念頭に置いているかのように「アメリカやイギリスの大将みたやうに、へいたいをすてて、じぶんひとりでにげて行ったりするものは、ほんたうの大将ではないのです。大将でもニセの大将です」と、資質に欠ける米英軍の指揮官を描き出していた[109)]。このように、日本軍の強さは歴代の戦国武将たちが兼ね備えていた武士の精神に由来するものとし、それを持ち合わせない米英の弱さを強調することで、子どもたちに武士の精神を身につけ強い日本人になることを求めていたといえよう。

続いて「神」に関連した作品について論及したい。子どもたちには、正月[110)]や大詔奉戴日[111)]に戦勝祈願のため神社を参拝することが推奨され、出征についても「カミサマノクニダイニッポン」では誰にでも「カミサマガタガツイテイク」[112)]と、神と一体化した日本及び日本人が説明された。

さらに、太平洋戦争において戦死した実在の軍人たちが「軍神」として紹介されるようになる。『コドモノクニ』では、加藤建夫、山本五十六、山崎保代が紹介され、彼らの幼少期のエピソードを交え華々しい最期で終えた人生が、子どもたちの手本として描かれた。例えば、加藤建夫については、日露戦争で戦死した父の敵を討つために幼い頃から軍人になることを望んでいたことや、敵には恐ろしい荒鷲であったが子どもには優しく支那の子どもにも親切にしていたこと、日頃から心と体を鍛えて大胆不敵な人格であったことが紹介された[113)]。山本五十六については、家が貧しくても懸命に勉強していたことが示され、不自由な境遇であっても努力をすることの大切さが説かれていた。また恩師への礼儀を忘

れず、部下の死に胸を痛める優しい人柄であったことが紹介され、「元帥のたましひ」はいつまでも国を守り「われにつづけよと叫びつづけてゐられる」と説明された[114)]。山崎保代は、アッツ島で指揮を執った部隊長であり、作品でもアッツ島での戦いの様子が示された。「みんなで死なう」と突撃の覚悟を決めた極限の精神状態でありながら、電信所での誤字が一切なかったことや、日本兵が「一人のこらずきり死した」こと、負傷兵も「はらを切ってみんな折りかさなって」死んでいたことが紹介された。アッツ島の戦いは公式発表において初めて玉砕の表現が使われたことでも有名であるが、『コドモノクニ』において玉砕の表現はなされなかったものの、部隊の全滅に関しては報じられていた。さらに「山崎部隊は死にがひのある死にかたです。ぐんじんとしてはこんなにりつぱに死にたいものです」「死んで勝ったのです」と、自らの命に代えても国を守る戦い方を理想として掲げ、その決意の大事さを子どもたちに伝えていた[115)]。このように戦死した３人の軍人を「軍神」として紹介し、国のために勇敢に戦い死を迎えることの栄誉を印象づけ、子どもたちにもあとに続くように促していた。

また、近親者の戦死も身近となった昭和19年には、靖国神社や英霊についての作品が増加する。国のために立派に戦い戦死した父の後に続いて、将来は敵を倒すために軍人を目指すことが理想とされた。例えば、部隊長からの手紙で父の戦死を知った少年が、勇敢に戦い「天皇陛下のばんさいをとなへながらにっこりわらって死なれた」父に続いて「大きくなって飛行機で戦車で軍艦でてきをこっぱみぢんにやっつけたい」と自らも戦地へ赴こうと決意を新たにする少年の様子が描かれていた[116)]。

おわりに

以上、本論文では幼年絵雑誌『コドモノクニ』における戦争の描き方を検証し、子どもたちに戦争をどのように理解させ、戦時下の理想的な子ども像をどのように醸成したかを考察した。同誌は、子どもに対する絵雑誌の影響力を充分に理解し、その教育的価値を重視していた。創刊当初から時事性と国際性という特徴を有し、子どもに対して社会を正しく理解することを求める編集姿勢が貫かれた。戦争や戦局についても子どもに身近な時事的内容、国際的内容として紹介された。しかし、煽情報道が加速するマスメディアに対しては疑問を投げかけ、政治・社会的思潮からは一線を引き、教育的立場から理性と品性を保とうとする一面が

あったことが明らかになった。

なお、この編集方針は内務省や他誌編集者からも理想的絵雑誌であるとの評価を受け、これ以降『コドモノクニ』は、国家の模範的絵雑誌としての性格を強めていく。したがって、政府が推し進めた節約と貯金についても積極的に宣伝するようになり、中～上流階級であると想定された読者に対しては、戦時としての意識改革をするよう求めた。このように、理想的な子ども像を描きだすことによって、子どもたちに戦時思想を植え付けていった。さらに、太平洋戦争開始１年足らずで戦局が劣勢に転じると、同誌が重視してきた理性と品性が消失し、絵には抑制がかけられていたものの敵兵の民族性をも批判する文言が表出し、終戦を待たずに廃刊に至った。

1） 中村悦子・岩崎真理子編『「コドモノクニ」総目次（上)』(久山社、平成８年)。
2） 中村悦子「絵雑誌の研究・戦時下の出版『コドモノクニ』の場合」(大妻女子大学『大妻女子大学紀要・家政系』34号、平成10年)。
3） 濱口由賀「絵雑誌『コドモノクニ』に現れた子ども像　大正・昭和戦前期における一典型として」(大阪府立大学『人間社会学研究集録』１号、平成18年)。
4）「ムツキイの世界旅行」第１巻第５号（大正11年５月)。以下、巻号数のみのものはすべて『コドモノクニ』を表す。
5） 価格の変遷については、第16巻第12号（昭和12年12月号）より60銭に値上げ、第17巻第10巻（昭和13年９月号）で55銭に値下げ、第21巻第３号（昭和17年４月号）で50銭に値下げ、第22巻第５号（昭和18年５月号）で40銭に値下げと、時局により変化していく。
6） 上笙一朗『聞き書　日本児童出版美術史』(太平出版社、昭和49年)。
7）「『コドモノクニ』編集部」第５巻第２号（大正15年２月)。
8）「本紙に対する御希望」第３巻第９号（大正13年９月)。
9）「お母様方のために」第４巻第２号（大正14年１月)。
10）「編集室にて」第11巻第１号（昭和７年１月)。
11）「編集後記」第17巻第10号（昭和13年９月)。
12） 同上。
13）「編集後記」第17巻第11号（昭和13年10月)。
14）「編集後記」第17巻第12号（昭和13年11月)。
15） 佐藤広美「児童文化政策と教育科学　内務省『児童読物改善ニ関スル指示要綱』(1938年10月）をめぐって」(首都大学東京『人文学報．教育学』28号、平成５年)。
16） 中村悦子・岩崎真理子編『「コドモノクニ」総目次（下)』(久山社、平成10年)。
17）「編集後記」第17巻第13号（昭和13年12月)。
18）「皆さん入学おめでたう　内務大臣末次信正閣下のおはなし」第17巻第４号（昭

和13年４月）。

19）「ミナサンハリッパナニッポン人デス」第18巻第６号（昭和14年６月）。

20）「お母さま方へ」第11巻第３号（昭和７年３月）。

21）「宮さま」第13巻第13号（昭和９年11月）。

22）「満州国の天子さま―奉迎の歌―」第14巻第６号（昭和10年５月）。

23）「お母さま方へ―絵の説明―」第12巻第12号（昭和８年10月）。

24）「マンシウノヘイタイサン」第14巻第２号（昭和10年２月）。また絵の作者について「宮本正名画伯は、派遣軍・機関銃中隊に加つて満州に親しく精励され、昨年凱旋された名誉ある帝国軍人です。」と紹介されている（「絵の説明」第14巻第２号、昭和10年２月）。

25）「バクダン小僧　No.5」第15巻第７号（昭和11年６月）。

26）「バクダン小僧　No.6」第15巻第８号（昭和11年７月）。

27）「バクダン小僧　No.9」第15巻第13号（昭和11年11月）。

28）第11巻第５号（昭和７年５月）。

29）「ワガ陸軍ノ廿四糎列車砲」第15巻第１号（昭和11年１月号）。

30）「お母様方へ」第11巻第３号（昭和７年３月）。

31）「軍用犬・警察犬」第11巻第11号（昭和７年９月）。

32）「絵の説明」第11巻第11号（昭和７年９月）。

33）岩村正史「『写真週報』に見る民間防空」（玉井清編『戦時日本の国民意識―国策グラフ『写真週報』とその時代―』慶應義塾大学出版会、平成20年）115頁。

34）「敵機襲来」第12巻第12号（昭和８年10月）。夜間の都会の空を、煙幕を張って守る航空機の絵と共に「あわててはいけないチヤントご用意はできてゐる！」「敵機来れ、ご待ちかまえてゐる」などの文章が付された。同号「お母様方へ」の頁では、「過般八月に行われた関東防空大演習は空襲に対する幾多の生きた教訓を投与してくれました。私たちは平常からその心得を消化しておいて、一旦緩急の場合はあくまで沈着と勇気をもって望むよう、お子様方にも十分感得させてください」と防空に対して呼びかけられた。

35）「空中戦」第13巻第８号（昭和９年７月）。

36）特に『コドモノクニ』では東郷平八郎を偉人として取り上げた作品が数多く掲載され、海軍記念日の文字は見当たらないものの、「東郷大将と海洋少年団」第９巻第４号（昭和５年４月）、「ナンデモ一番！東郷平八郎」第12巻第11号（昭和８年９月）では、東郷平八郎や日本海海戦について紹介している。

37）「センソウトヘイワ」第16巻第５号（昭和12年４月）。

38）第16巻第15号（昭和12年11月25日）。

39）「しなじへん」第16巻第15号（昭和12年11月25日）。

40）新島繁「人間的品位（ヒューマン・デイグニテイー）の尊重が願はしい―遠縁のある若き母親に寄せて―」第16巻第13号（昭和12年11月）。

41）「ボクハシヤンハイニヰマス　ワタシモヨ」第17巻第１号（昭和13年１月）。

42）「上海カラ」第17巻第６号（昭和13年５月）。

43）「大センソウハコレカラデスボクラハモノヲ大セツニシマス」第17巻第10号（昭和13年９月）。
44）「ドカン」第16巻第12号（昭和12年10月）。
45） 新島、前掲「人間的品位（ヒューマン・デイグニテイー）の尊重が願はしい―遠縁のある若き母親に寄せて―」第16巻第13号（昭和12年11年）。
46）「編集者の言葉」第16巻第13号（昭和12年11月）。
47）「編集室だより」第17巻第３号（昭和13年３月）。
48）「編集室だより」第16巻第11号（昭和12年９月）、「編集室だより」第17巻第３号（昭和13年３月）。
49）「コドモノクニイウビンヤサン」「編集者の言葉」第16巻第13号（昭和12年11月）。
50） 玉井清「『写真週報』に見る英米観とその変容」（前掲『戦時日本の国民意識―国策グラフ『写真週報』とその時代―』）、359頁。
51）「キノフノウミ」第21巻第３号（昭和17年４月）。
52）「戦況ニュース」第21巻第３号（昭和17年４月）。
53）「スキヘイサンノセンタク（陸軍省検閲済）」第21巻第６号（昭和17年７月）、「クヮエン・ハウシャキ（陸軍省検閲済）」第21巻第６号（昭和17年７月）、「トラック・シングン（陸軍省検閲済）」第21巻第７号（昭和17年８月）、「テキゼン・ジョウリク（陸軍省検閲済）」第21巻第７号（昭和17年８月）、「ヒコウテイ（海軍省許可済丙第四〇二号）」第21巻第９号（昭和17年10月）、「くちくかん（海検丙第九二九号）」第22巻第５号（昭和18年５月）、「（無題）（海検丙第1509号）」海の荒鷲が敵アメリカの軍艦を轟沈していますとのキャプション有、第23巻第１号（昭和19年１月）。
54）「センリョウ（陸軍省検閲済）」第21巻第７号（昭和17年８月）。
55）「スコオル・シングン（海軍省許可済三五四号）」第21巻第７号（昭和17年８月）。
56）「ニュースゑばなし」第21巻第５号（昭和17年６月）。
57） 玉井、前掲「『写真週報』に見る英米観とその変容」、365頁。
58）「くうしふとへいたい」第22巻第５号（昭和18年５月）。
59） 山田三郎「外国のお伽噺と日本の童話文学」第22巻第１号（昭和18年１月）。
60） 玉井、前掲「『写真週報』に見る英米観とその変容」、371頁。
61）「ビャウキンセン」第23巻第２号（昭和19年２月）。
62）「タンレン」第23巻第１号（昭和19年１月）。
63）「陸軍少年飛行兵」第23巻第２号（昭和19年２月）。
64）「ウミノユウシノ」第23巻第３号（昭和19年３月）。
65）「編集後記」第21巻第２号（昭和17年２月）。
66） 同上。
67） 前掲「編集後記」第21巻第２号（昭和17年２月）。
68）「マニラ」第21巻第２号（昭和17年２月）。
69）「南ノクニノオトモダチ」第21巻第２号（昭和17年２月）。
70）「ジャワ」第21巻第10号（昭和17年11月）。

71）「泰」第21巻第９号（昭和17年10月）。
72）「シナノコドモ」第21巻第３号（昭和17年４月）。
73）　小田義幸「『写真週報』に見る模範的国民生活」（前掲『戦時日本の国民意識国策グラフ『写真週報』とその時代』）、79-83頁。
74）　革製品だけでなく、鉄製品についても鉄は戦地に送るものとして、木製三輪車を代用していることが示された（「テツハ…」第20巻第８号、昭和16年８月）。
75）「カシコイ三郎」第17号第11号（昭和13年10月）。
76）「メンタルテスト解説―隣組と子供の問題―」第19巻第12号（昭和15年12月）。
77）「童謡選評」第20巻第７号（昭和16年７月）。
78）　前掲「皆さん入学おめでたう　内務大臣末次信正閣下のおはなし」第17巻第４号（昭和13年４月）。
79）「シナノアサガホモニツポンヘクレバリッパニナル」第18巻第８号（昭和14年８月）。
80）「オモチヤノヘイタイ」第18巻第９号（昭和14年９月）。
81）「大成丸」第18巻第８号（昭和14年８月）。
82）「お母さんのページ―編集部―」第18巻第８号（昭和14年８月）。
83）「キウメイテイ解説」第19巻第９号（昭和15年９月）。
84）　奥健太郎・鶴岡聡史「『写真週報』に見る学生・生徒・児童」（前掲『戦時日本の国民意識―国策グラフ『写真週報』とその時代―』）、226-236頁。
85）「トバセヒカウキ」第18巻第７号（昭和14年７月）。
86）「ヒカウキノイロイロ」第18巻第７号（昭和14年７月）。
87）「マハウノセキバンフキ」第21巻第２号（昭和17年２月）。
88）（無題）第21巻第３号（昭和17年４月）。
89）「コドモ・バウクウガウ」第21巻第６号（昭和17年７月）。
90）　小田義幸「『写真週報』に見る食糧問題」（前掲『戦時日本の国民意識―国策グラフ『写真週報』とその時代』―）、64頁。
91）「九月の『編集手帳』」第22巻第９号（昭和18年９月）。
92）「ジャガイモ」第22巻第９号（昭和18年９月）。
93）「いもがゆ」第22巻第９号（昭和18年９月）。
94）　小田、前掲「『写真週報』に見る模範的国民生活」、98頁。
95）　前掲「ニュースゑばなし」第21巻第５号（昭和17年６月）。
96）「貨物列車」第22巻第３号（昭和18年３月）。
97）　小田、前掲「『写真週報』に見る模範的国民生活」、108頁。
98）「キモンブクロ」第21巻第５号（昭和17年６月）、「慰問人形」第21巻第７号（昭和17年８月）、「しっかりかかう（慰問帳）」第22巻第９号（昭和18年９月）。
99）　金澤嘉市「作って送ろう慰問帳」第22巻第９号（昭和18年９月）。
100）「ニイサンノシュッセイ」第23巻第１号（昭和19年１月）。
101）「バウヤトオカアサン」第21巻第１号（昭和17年１月）、「編集後記」第22巻第７号（昭和18年７月）。

102）「編集後記」第22巻第７号（昭和18年７月）。
103）「ハタラクオネエサンタチ」第23巻第２号（昭和19年２月）。
104）「ハタラクマサコサン」第23巻第２号（昭和19年２月）。
105）前掲「キノフノウミ」第21巻第３号（昭和17年４月）。
106）「編集後記」第21巻第３号（昭和17年４月）。
107）「今月号の絵の見せ方」第21巻第５号（昭和17年６月）。
108）「（日本武将物語・一）上杉謙信」第22巻第６号（昭和18年６月）。
109）「（日本武将伝・二）豊臣秀吉」第22巻第７号（昭和18年７月）。
110）「ハツマキリ」第23巻第１号（昭和19年１月）。
111）「アサノオマキリ」第21巻第７号（昭和17年８月）、「ハヤオキカケアシ」第22巻第12号（昭和18年12月）。太平洋戦争開戦の詔勅が出された昭和16年12月８日を記念する日として昭和17年１月２日の閣議で決定され、同年１月８日を第１回とし、以後毎月８日を大詔奉戴日とすることになった。
112）前掲「ニイサンノシュッセイ」第23巻第１号（昭和19年１月）。
113）「輝く空の軍神（加藤建夫少尉のお話）」第21巻第８号（昭和17年９月）。
114）「元帥のご戦死（山本元帥のこと）」第22巻第９号（昭和18年９月）。
115）「アッツ島の山崎軍神部隊長」第22巻第11号（昭和18年11月）。
116）「戦死したおとうさんに」第23巻第３号（昭和19年３月）。